



「ご近所」は素晴らしい

■集まって住む価値

あの日は、マンションの住まい方に「大きな教えを印した日」でもあったように思います。

被災地では、同じフロアの1軒のお宅に何軒もの家族が集まって、励まし合いながら余震をしのいだという話をたくさん聞きました。「ふだんは会釈を交わすぐらいで話をしたのはその時が初めてだった」という組み合わせも珍しくなかったのです。

首都圏のマンションでも、「一人暮らしが急に心細くなって、様子うかがいにこわごわドアを開けたら、通りかかった顔だけは知っているご近所の人から声をかけられ、そのお宅へお茶に呼ばれた。居心地のよさにそのまま夕食までご馳走になり、やっと落ち着いた。いざという時、本当に頼りになるのは隣人なんですね」と力を入れて話す人もいました。

マンションという住まいは、プライバシーが確り守られる独立性の高い居住空間でありながら、たった5秒分隣には人が暮らす。実は、これ以上ない“安心な家”なのです。決して画一的なものではない、人と人がつながっている安心感を得られる価値ある住まいです。近所隣りが自然に挨

拶を交わし、さりげなく気を配り、情報を伝え合える関係を築いておくことは、いざというときにとても大きな意味を持つはずです。

このごろは、総会の議案書をポストへ入れるのではなく、高齢者世帯には手渡しで配る管理組合があります。防災ワークショップを開いたり、各戸を安否確認して回る防災訓練などコミュニティ作りのきっかけはたくさんあります。マンションに住まう人たちの近隣意識は「震災に強いマンション作り」の最高のソフトです。

(財団法人マンション管理センター主席研究員、廣田信子さんの講演から)

■フロア懇親会を開きましょう

以前、いくつかのフロアをまとめて懇親会を開いたことがありました。それを復活するため、管理組合で準備を進めています。これからは各階ごとに絞るので、一層“近しさ”を増せるはず。単なる「お茶会」で終わらせず、楽しい集まりに育てていきましょう。ご協力をお願いいたします。

